

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

ダイアン・ラヴィッチ 著, 末藤美津子・宮本健市郎・佐藤隆之 訳 『学校改革抗争の100年』

(2008年 東信堂)

20世紀は子どもの世紀といわれた。これからは子どもこそ主人公。こう主張した哲学が「児童中心主義」と呼ばれた。子どもに無意味な記憶を強制する学校は、前世紀の遺物に過ぎず、抹殺されるべきものと批判された。子どもが学びたいと思ったことでなければ、何も学ばない。学びたいと思ったタイミングでなければ学ばない。すべて子どもの興味を基準として、学ぶべき内容・タイミングを決めなければならない。これが「新教育」と呼ばれた。

しかし教師たちは子どもが学びたがらない存在だということを体験的に知っていた。子どもが学びたくなるタイミングを待っていたら、永遠に学びが成り立たないことも知っていた。ここに理論と現場との亀裂が生じた。このダイアン・ラヴィッチの本は、まさに20世紀の100年間を通じて戦わされた論争史を描いている。

親の見栄でしかないラテン語教育

おそらく多くの読者は、次のような記述を発見して驚くことだろう。「1900年にはアメリカのハイスクールでは50%の生徒がラテン語を履修していた」。ラテン語が日常生活に役立たないことは自明のことだった。しかしハイスクールとはラテン語を学ぶ学校と見なされた。なぜラテン語が教えられたのか。それは当時のカレッジで使う教科書がラテン語で書かれていたからである。それは「教養人のマント」だった。つまりラテン語が実生活には役立たないことを知りながら、多くの親は子どもにラテン語を教える学校に行かせたがった。親の見栄である。

学校教育は実用的であればいいのか

しかし社会はどんどん変化してゆく。もっと実生活に役立つ内容を教えるべきだという声がかんたん高まってくる。工業教育、職業教育、自然学習、裁縫、料理、手工訓練が必要だとする論が次々に登場してくる。ラテン



語に比べれば、こうした教科のほうがはるかに実生活では役に立つ。しかし何ごとでもそうだが、極端に走ればプラスよりもマイナスが目立ってくる。実用的な教育が必要だからといって、「洗濯作業コース」まで学校で教える必要があるのか？ ラテン語の学習が人の知性を育てるという神話も疑問だが、生徒をわざわざ学校に通わせ、「他人の洗濯物のアカ落とし」に時間をつぶすことも疑問だろう。

第二次世界大戦後になると、ハイスクール進学者はさらに増え、ラテン語など実生活に関係のない科目ではなく、もっと実生活に役立つことを学びたいという生徒が増える。その挙句には、ただ年代の記憶ばかり強制する歴史などいらないと主張する人がでてくる。その学校では歴史の授業を廃止して、その代わりに自動車運転のトレーニングを教科に入れた。しかもその理屈づけが興味深い。「歴史の学習よりも自動車運転の教育のほうが、責任感、他人の権威の承認、批判的思考を教える」。

見かけの「理論」に騙されない学習を

この600ページを超える大著を読んで思うことは、人間がいかに見栄に弱く、キャッチフレーズに引っ掛かりやすいか、見かけだけの「理論」に騙されやすいのかである。こうした実例が次から次へと豊富に登場してくる。もともと学校のカリキュラムは、時間という物理的な枠がある。授業時間には限りがある以上、なにかの教科を膨らませれば、どこかを減らさなければならない。だから人々はさまざまなレトリックを総動員する。ラテン語の学習は「精神」を鍛える、自動車運転の学習は「市民としての責任感」を育てる、こうした主張にはなにがしかの正しさと、なにがしかのいかがわしさが含まれている。そしてラヴィッチはいう。「アメリカ史の重要な論争、偉大な詩人の言葉、科学の果たす役割を学校が教えてくれなかったら、子どもたちは学校以外の情報源に向かうだろう」。